特別
へ13
4203
5

昭和五十八年四月三日
神保五彌氏寄贈

58 2839

風月花情春告鳥巻之五

金龍山人狂訓亭

江戸　爲永春水著

第九章

町奴の小やらん辰巳の里に走らぬ者なきまでの豪傑なれども細造作とし二家ありけるを独身者道具屋吉の仲買と呼るまく監定上手の姉さまく金まうけをもするうちに男の好のごとくなれども疳とも癇とも名付難き性質なれども貞操堅固にして貞節の誉高く彰箭は業を強の

附合度々に閑雲よりイイ吉山もものすごめぐり彼鳥籠の中子と
ゐるとて御名を雅楽とよび俗の名八文吉とのゝ毎日間を立ち
まぶりに出ずとのゝ客ゐりしが今見さうふ内情のある女と見人
て二十四文の大酒田我乗するわどうつくしき他のめとは赤の振子
客衆の振とゝ張ゆく和合所の興安と推参らまてゐる名八仲
次とのゝ　　てゐるやうな人の例の異体で稽古先推参と見ず
けるも振とゝまたどこぶるよあやしく見てゐるものごゝろ
経ぐるくまれば踊りのねんごろ子よりく氣を張て閑なヨ

ものゝ八ぶ中おまぶ中ことゝもがあつても差中にだゐり
ゐるく居る振よりのけまどゐる俗八おまもすとゝ八振と踊を
考へてく子面白づくの振と見待く一連に歩ゐるとのふものく
初も性と先方でゐるまてく居るものゝ子まぶごと金性ありがて人が
他の機嫌をゐるく拝べのごゐゐ酒も初も臭にゐるものゝ子
ゆぶ立紙しく若男をして考へる振をまけ八ゆくも投人ゐゐ子子
左振思ぶのく　仲ヘヲ左振ゐ人振ゐ子ゐ子ゐ子ゐ子ゐ子
氣ぶ付みゐゐとヨそして欲徳を考へてく毎日毎晩閑是性七

乗んで居こちらを覗ぞ子ト鼻の先でめらりて居る者人
ぎろりと仲間を見てゐるぐら「ぶつもいろてもまめ人の振舞
ゴロゴロ人貴様ア実に言言ごろうかもいろいろけれど馬鹿
さんハ者ぢゃアまづ立人すぐだふあり弾細の師匠ありゐ
此頃ハかし一駄屋の方が不首尾ごろう思ふ振ふうろけ
ど振ぶ表醤をちろぐき見振のとちごろう振統のあ入今勇めて
亀のごア入ちまこちろ雅さんの方でもあれが振ものでも仏を
思ふうやまこれと表て人ちろうまづかんの付句で往のごアナ

ちまこ丁表ちまこれ丁人持沈んでるめ人のあくちくしこ堀の
内の日ぶあの通ちの大言ごろふじゃア人ゐ帰らふとの人ハ
気人ちまこちろうしこめ人のるも業ごちまるしこちろ言
表ち居ちの仲「ンあ人の女がちまこちろ帰るのが表ふうて三日
四日の居続ち人、其振ち者ちのくものひでちまこちろたちと
ぬぐひきだしてまくぬしてちゆまる人ハ那ちまこちが出
表ちまこちろめ人ハぢゃでめきちまこちろくまと自地でごろ付くちく
まる人トかし一泣表ちまこの人「ンとまがゴロゴロ人とのものごア出

を喜ぶ出来てもめんをとらぶ出来てもアア今日の酒をよゆく考へ
見せうとでもなく人も後を立てく居るぶらく側の舞妓を
あく立後酒でも呑ぐみうぐらのと仕方の自慢う知られが
言言に男ひすぐ紙しもなく人わ出合こうこうもらへ
と男のうう家内ぐさ人捨くく紀をしもこのを食ぶ人
勢市ると言ぐしと仕しも出れうとあるうく流人を後を
仕ぐ先へ芸屋へ出ぐ結局門くくを引ぐ後に出ぐ
形しも逢ひと男ぐだうるぐ後を知られぐ

人仕を出ぐみうう宅出やア居れへと祇園えが来日を
言くとしく人出く居るうびまを仕ぐ引くくまうと左紀
ぐくみうぐ祇園さんのうく人座しまでれへと左紀で
とくくアをを見ぐを人の方でも後ぐ変ぐのおれぐち
ぐをうの紀仲アく左紀サ紀まやアくやくうでくト
くやくうくまくの人のをのまを見ぐく貴ぐぐのとも貴紀を
紀と男ぐく明神さまの見仕門まを人をまうまくうまくみぐ

宅へ帰りて知己の雅友亭と号し客人来たれば
子はいづくにか居たまふ人やらんとくくと気がとろくしたる悔しの
ぶえんとさまざまやうのものあらん
ろろ人びのぐ幾度まくく安したまふ者とあるを
叶ひ人まくどうとまふ人のいとよろぶのくとそ人とがが
のろまふ幾程でもおまたをのどめ勢をとるとも猪に
まろヨト　ぶえん左程久猪にしく
もよろの人名義物ふ況まろとあまぐ実のく猪に

[illegible]ると[illegible]時は、せめて[illegible]便なく好ごと思ひ[illegible]

さて泣く居る

[illegible]解[illegible]の内に[illegible]の振[illegible]仲[illegible]

[illegible]性男の[illegible]好[illegible]て流れ[illegible]者

[illegible]振[illegible]思ひ[illegible]便

[illegible]ぺん[illegible]引く者[illegible]

[illegible]せ[illegible]笑ひ[illegible]顔[illegible]

[illegible]左振[illegible]

[illegible]

[illegible]ふとのふのうへンなのある女ごなり[illegible]振る[illegible]

例[illegible]れ[illegible]ごと[illegible]

[illegible]仲[illegible]男の振[illegible]

[illegible]せぬ[illegible]弧の[illegible]頃の居つづけの[illegible]

女に[illegible]を奪われて[illegible]

[illegible]傷[illegible]恨[illegible]の[illegible]

[illegible]ごと[illegible]

[illegible]

居てうしがやうくと気絶らう平〳〵仏様よこをなきけと
云へとも男の様ぐ変つて居こハ家早不乃こと
ぬくも左様なることをうバ死んぐ往来がまつ〳〵ぬ
左もあるうバ為みこハ水自をせ〳〵ことをかりこと
のをこの〳〵ことを意二うる気をうりもも意西京様気
ひとりこを西るう今ひるも車屋が混こうをこ思へ〳〵ことも
ぶの池現方持も我功合も初めうう人とかう間の光
眼様ちく男に向ひ

仲
一夜さうんこうふ考へく見こうこ今までのこハこんみ様ぶころる
うくこヨ家泉我ろうこうこ見れへぐ〳〵まで多人を眼んこバ
様ぐ自物ろうこ様みめふ男ハまこそ今までハうこうこ
たらふ場要〳〵くまこよめんまるこ人〳〵くこふ居く様のこを
多人の様こうこうこもこふころふ様ぐうこうこ
涙変ちのひこうる様みこそすろこうこる
そこ人様をあすこうこ〳〵ちく紙きるるれども
右ふ方こうこをこ要様ちこをもを見こうこハ

さぞあらんとよく〳〵察して真実知り他人のうへ
迄もよく〳〵しん〳〵砂糖を持かけるゆへ人情の
わけも其主を知る人となるべし主人で無理をせぬ人の
心にも主を持つとも六分でこのくるわにとゞまりけり
りっぱしくもかけ引ばかりでもかしこりのへし気とも
清きも知る人ぞ知るとおもわれるがくも愚智のバから
ぬる事を能其バ当るの気持の口おもしろを防がん
ある公界の分解をとくよりあのき

第十章

折から路次より足音しく障子の外より内を覗きつく男の
姿「おさんちよつと「アイ誰ダト言ながら彼の男の顔を見バ
其人直ぐ仲次八おまへてやと思ふこだわり今まりた考へて
居るおもへこの世間の恐ろしさ人でも来たのかそのまゝ言ねバ直に
出でくりがらり無心うえる恐いやう知人のごとく揺く子風しく〳〵
居る時雑の面八つもとなく出涙しくう人とて夜露の空
「つ耳ともおもえ人涙は涙く添とろれ左様わか〳〵く入まつがわ

今夜アなのこと程是れ人うう且彼の為をいく程人新ひと嘉
いろく云て今夜アこれねがおそらくらく気人と一緒ゝ行是で
も出掛れ人ヨイく立ぐ宅ゝ居ことのてハようとへゼナント用ぐ
のうう男アイよりく云ハ春迄中ことまゝ下ト浮ゝ行
神戸人知ゝ思ふ考うのよく是おぐ考ことうあ人と
一連に出く程ゝふる所を踏ゝ弾ゝハまぐあ孫ぐ
のう人とゝ稼く遊ゝく居る女ハぐんまうゝ更
這入るこの時ハゝや月も雨ゝ入けまぐうり火を下ゝ

陸ゝ出ぐしゝ戸ゝ入ゝ家の方も人ぐう
夫ゝ仲家の方の雨戸をかく人見れ人ゝ家ひやうト行動かく
家行火鉢ゝ炭を入ゝ火を入ゝ蒲団をうけぐすれ
バ神ゝ人云ゆく雨戸ゝ方く寝うまゝだあく火鉢の
例ゝ家ゝふゝすゝうく居る眼のふちをあうくして浮る
頭ハてらく〳〵とひうゝ前髪の毛ハぐらくと天ゝ長ゝうゝ
うゝふゝしき面ゝ粧をふゝ〳〵姿ゝして横流ゝ家人
智の内に何ぐしても水煙ゝ火ぐうゝ

ありく　寝まきをまとうて　医師　迎へに　サアまづ　宅へ
来て　寝ねんこうべらぐわんせ　何時までぐづくして居るのぢやア
家へ　帰ると　寝くたれる　しるもすまぬと　笑ひながら
ひの　仲居も　少し　笑ひ　仲　寝ねもの久　ひくうまを
いろと　寝ねんこうと　ひとりぐわんせ　サアまづ　寝ねな
仲　アイトさま　嬉しうて　笑ひ顔　くしやくしやと　帯解きぶ
まうとて　寝ねる　枕元に　居る　サアまづ　寝ねん
のぶまうて　仲　まづ　蒲団をまうてそこの

此時　ありて　女郎を　枕元へ　医師の　出を　堪へ　ぐく
と　用を　ひつける　あー　小ぶまうと　ありしを　見て　仲
出舞の　際　ぐすりく　居る　寝ねへの　仲　まづ　用ふ
うへ　迎へ　ぐすりく　出て　新　私　居る
去　左様　ぐすり　今　帰ること　居て
乳　この　乳の　女ぞと　仲　左様　人
ぐろ　寝ねへ　迎へと　ぐろ　おまへの　知　ぐすり
まうと　ありしこのぐあんまりくしてあまへの　乳の

ゐる様を着て却てぶうしょうしょうきん　仕ようちぐ　ぞもあ
をつくこまるわどうわ私ぐるよあるせがあるショト　ちゃ　ぞを
仲　ゑんよ左様ぐろけ　私ぐ　ろくこいつこのをッイこと
ほくいつまでも居こョ　嬢様こくろあまさどうさくんこと
ろふまトずつふろく　遠へ　ぬきこ戸　メっものくくあるところを
やうくあけく外出戸をぴっくやうと　あるぐうけのやうう　出こと
物をあけあこを　路次をかくくと　大如ぐ　あるぐ　家　茶とう
中ふぶ居の　陰みのあけぐ　身をよせ　様子をうんぐく　考うしぐ

りうあも　思ひ入うる様みうそ　外の方へ　大如せば　出へるげてられと
手紙をうく　続へ　同じとみ　出ぐ　遠うう　様ぐして　遠大ゆきて
ぐやうくくのとうそ　遠捕る　お「コレぐ　ぐうめ　ぐ　宅へ　遠入ョ
仲「アレマア　ぐ　ぐくくョどぐ　お「　ぐやうまくうんでもいひ
うう　物でもくくト　コレサ　ぐう　様ぐうう　ぐうのやうとく
で　押　関者をくくく　外　ぐ　ぐうう　ぐうくくくくくくくく
引入　家内　抱込　戸をうくくうけぐねをうけく　医様の方へ
抱居　お「　ぐ　ぐ様の　ぐけこ　嬢ぐぜ　コレいくうぐんぐぐうくくみるする

りくト仲居の身をちよんと突く 匠姥人がいう 武「歩く／＼
這入るヨマア此婆ハ騒ぐばかりで讃の声さへまりがすく
ねへでもよしよしてサアく／＼そのこねへ下手をとつて
引張る仲居ハ後ろへまわりふところ探り付くおまへのまゝ
まづら 仲「アヽまく宴に入る嫌るもんぢやアそのねへ所を
皇ねるまくりよふなるときるゆへまなまちまつて
も到此猿よ今晩の猿よ手洞く急ぐるかんがやアるせ
此猿よそでしらうときてまづ気がつまらぬ

女「ヘンそれは人だらう逢やアしねへ此方もうでしらくまつく気を
もむでしらうドやアねへかとまつたくぞろのろくもてそう
方のひざがあやんとしてゐく妙な心があらう行ずまうねへ
様じやア他の噂が女郎買も芝居も往きるのを遊でまぢ
まくとんまよのろひとまして居まるのろサア浮気やア承知ね
総へナ浮きしめへ 仲「おまへが浮きるのがそのヲトいんなんずら
匠姥人がいう 女「ヲヽ引 冷て人足ご沙のようで世も心もなれずとくを
まく漏るがりくト麹と魚 仲「ゆくらーい 女「一年またやア出で

ようふう　仲「アレまつこあんな
　　おちつこのおそそそんなみそのようなのはこまるとまつこ
　　こまーづめやふうばーくにんまつ人のりこ家
丈「ヲヤあつこの行動とハあのとてづぜちよふどあり人のこと家人
　　材くうこう出仕ぬこ　仲「そ家のごれ人金銭とまこ児女人
　　切者ゑ振り振ごま　丈「ナニまごと十めだろうごらふが嫌こ妙の
　　ふぐ大そふこ氣ごるゑふめごま　仲「ちつと氣れうま　丈「モイ
　　おもしろくもね児女の振ゑとをいろま　仲「そまでなまこハ

新造ッ子ご振ごものヲ　丈「ちつやちやちーのこまごま　今ごらやま
ちつこの大ひのを張ちゑと男川くひこの浦風こいろくすこ
仕而ゑのまこハ貫毛を氣れするくこめ女でるこちやま　用
丈つこれ人　仲「ヲヤ私やま家を振ゑまこ　丈「ナニまこ人ハまご
四人寿もこれ人ぢやま妙ハあこれ人のこ氣ごらやま　寿
振のこ氣ぐ居ごらふぐまごくゑ仕而もうこまこ振ごま
らいけれ人ちんちまこのこく振ゑを中くのハ極まふ人ぐそーて仕
むーの大ゑぐま　仲「ようヨ浦ひーでも私ご浦ひーちこ人ハ

氷
玉巻

浮世ひしゞゴ　友「アハヽヽ　そまごろう生猿ごとのみのごろ浮世ひしゝと
いのごのるのめうごごられ〳〵こそそごろりいハハそそでもお意そ平出
ののあを殺しうりのうまそこをはを利〳〵ろとしたまうどうも
ごろうごごそしく新るや分ろふ美見をいふもあうしのだやア
れ人う　仲「よウくのろくこそをこうくおいごめごれ〳〵トりの時
節門流の浮留理

「ろうる分に傳ちへ世界ろひれをおしあごめ

仲「ア春る辻よりごゝ　友「まこと長脅うモりいくしたを寝れろ　仲「ア

四月寝ろひうろ寝ひうろふれ〳〵　友「寝蓋寝れ〳〵ゆうごあうめ
ここあるやいくぶ宅の方ハぶしたまこ　仲「ナニ寝ろこんよよく
頭んで来ごしたまこ　仲「ナニ寝ろこんよよく
振ろそ長ごりやアひくのア引分の所人社で居てもまあの例よ
居るようみとろハれ〳〵　仲「うそをあはよろあぐでせ人人
いぐあるの辻に工友さん実正よおもしろうこうろよ春よんよ
関ろぶ宅に工てよのあるあのいく友ごろのいろこと年八分ア
ぐうあごに工友「業る宅義もうるものうあめよ智ろ女ぶある

さア今までは女の亂行をうけながら機嫌をとつて
情人のあるものゝ手 仲「アレサ 女「だからサ 仲「なにもおまへのじやア
よく若い人のいふことをきかねへ 女「まアコレ宿屋への手前も
ものでも此様な辭をあげて見せつけやアがるアまり淺ましい
ヨ 仲「あまり貞女がつてヨウとひとくたばれへ 女「ちくよく
ゆへとゝ氣をもませる雨の降るのをみるのか 仲「アッ
だ遠の路がつくヨ 女「そうでも付合ふ他人がはねへぞやうらぬ
すくやしいのが何様なとなるにしても女の人をきるとも

些稀様へ 仲「ナニ扨とて左様ぶけれど おまへ只女をつかまへての雑
ゆゑ左様ごろふとおもふことさへいやらしくなるヨウ ヨモウ私が
此もの利生あるのかどうもむくむづかしく此もさうなるのか ヨ 女「ムウ
くおまへも惚るからはもうたくさんねへ 卜 此時も悲しむ思ひも空しく
ますよく寝るとおもふまもそのうちおまへに逢ふ
此時するうち成刻の鐘コヲくとひゞきて雨のおとに
忘れめうてバラバラと風冷しき蕭寒の夜の千ともに
ゆつまでく「まづ巻でんぷうゆへまでぞござる。とさぞあく

仲「ヲヤ何ぞ嬉しがらせるよふな事をいふねへ 房「本当ヨのろけぐ

宵ごのホトヽギス時しもひゞく寺の音カンカン 仲「あゝ

成刻ごろ 房「あんまり今夜ハ欲の世の中が嬉しけへ 欲ざけサア

起ねへ夜食のしたくをしよふ 仲「マアチツト寝てゐよふしておくれ

おねへ誠にまアこうしていると 房「よくよくふしぎだおれが

今おまへとはなしをするうちにやしませうト 〆ねおきてあまえこんでうちやく〆をしなさけりやあんを

つけておく 仲「遠慮おしヨサア起まにせうて了

風月花情春告鳥巻之五了

新